計画策定における住民参加と今後の期待

八千代エンジニヤリング株式会社　正会員　○五十嵐　武
八千代エンジニヤリング株式会社　正会員　古賀　淳一
八千代エンジニヤリング株式会社　正会員　中川　義守
山口県周南土木建築事務所

1. はじめに

島田川に架かる三島橋は昭和 23 年に竣工され、現在、上島田地区と三井地区を結ぶ唯一の橋となっているものの、老朽化が激しく平成 10 年の豪雨で河床が洗掘、橋脚の一部が沈下したため、橋の半分を仮橋として供用している。架け替えについては、地域住民の切実な願いとなっており近年、実施される予定である。また、三島橋周辺の河道は、安全に洪水を流下させる能力が不足しているため、架け替えに併せ、河道の掘削・拡幅が計画されている。

しかし、付近には河畔林や広い河原、瀬・淵等の豊かな自然環境が残っていることから、橋梁架け替えを希望する住民もある一方、地域活動団体等からは自然環境の保全に対する要望があげられている。

このうような背景から、河川管理者である山口県では、地域の意見を尊重した多自然型川づくりを行うべく、「みしま水辺の会」を発足し、地域住民、地域活動者ならびに専門家を交えて、積極的な議論を行った。本稿では、これら一連の住民参加型の計画づくりについて述べると共に、その中で得られた課題や今後の展望などについて述べる。

2. 合意形成の手法

2.1「みしま水辺の会」設置

合意形成の手法としては、住民の生の声を計画に反映させ、将来的にも河川に愛着をもって頂くため、近年パブリック・インボルブメント（PI）の一手法として採用が増えているワークショップ形式を採用した。また、ワークショップでは参加メンバー全員が対等な立場で話し合いを行うことを大前提とするため、構成員を地元住民や地域活動者を主体とした「みしま水辺の会」を組織し、行政（事務局）は基本的に会を補佐する立場として位置づけ、規約として明文化した上で計画づくりを進めた。加えて、計画の作成上、専門知識が必要とされる場合も多分に存在するため、メンバーに助言・指導する役割として動植物の専門家を 4 名、アドバイザーとして配置した。

図-1　ワークショップ組織図

2.2 少人数での対話

メンバー同士の積極的な議論や主体的な計画づくりへの参加を促すことを目的に、18 名のメンバーを 3 グループに分け、各グループ 6 人の少人数とした。ワークショップにおける意見の集約なども基本的には各グループを単位として行った。

2.3 会場の設定

メンバーの負担を軽減すると共に、広く地域住民の参加を促すため、ワークショップ会場は改修位置にほど近い三島公民館で行った。

キーワード　住民参加，ワークショップ，河川改修計画，多自然型川づくり
連絡先　〒810-0062　福岡市中央区荒戸 2-1-5　八千代エンジニヤリング株式会社　ＴＥＬ092-751-1603

2.4 情報公開

ワークショップは原則公開として、一般傍聴も可とした。開催の案内は回覧版などを通じて行い、開催後は「みしま水辺の会」の進行状況などをとりまとめた「かわら版」を作成・配布した。

2.5 ワークショップでの作業メニュー

数回にわたるワークショップの中では、表-1 のような作業メニューを設定し、計画の策定を図った。

表-1 ワークショップでの作業メニュー

作業項目	作業の目的	主な内容
事業内容・河川用語などの説明	事業の必要性と内容の正確な理解	－
現地視察	当該事業を身近に感じて頂く	事業概要が記された河川平面、横断図を片手に自身の足と手で現地を確認し、課題の抽出作業を行った。
課題マップの作成	事業実施に際して予想される問題・課題の明確化と共有	大判図面に問題課題を整理し記入した。
自分たちの川づくり作業	自分たちの考える河川像を図や文字として明確化 意識や考え方の違いの共有	ベースとなる大判の平面図・横断図に自分たちの考える河川像を記入した。
グループ案の発表	主体的に考え、案を作成して頂く 情報の共有化	案を壁に貼りだし、各グループから発表者を一名選出し、案を説明した。
全体討議	ファシリテーターを中心とした意見集約	各グループ案を共有した上での発展的な議論を行った。

作業メニューは基本的にメンバーが主体的に取り組めるようなものとし、実際に手や足を使って行うよう工夫した。作業時にはメンバーのみでなく、傍聴のため来場されていた方々も各グループに参加して頂き広く意見や提案を求めながら改修計画を作り上げる形を取った。

3. 計画作成に住民が主体的に参加する場合の問題点

今回、ワークショップ形式で計画作成を行ったわけであるが、住民が主体となって計画作成にかかわる場合の幾つかの問題も見えてきた。大きなものとしては、川の持つ機能や特性などを逸脱した計画とならないようにするため、住民自身に河川に関する一定の知識が必要であるということ、また、住民自身が意図する河川像は抽象的な場合が多く、自らそれらを図や絵として表現できない場合、どのようにして具体的な絵とするのかもしくは、意図する内容をより正確に把握するのか工夫する必要があることなどであり、今後も全国の事例など参考に最適な手法を模索していく必要がある。

4. おわりに

今回、島田川において河川改修計画に PI を取り入れたわけであるが、地域住民への波及効果は大きく WS の回数が増す毎に、一般傍聴者の来場数も増え、意見も多数寄せられた。また、地域活動団体からは WS を題材とした新聞なども出され、最終計画は地域住民の意見を多く取り入れた計画として、ある一定の評価を得ている。

メンバーからは「今後行われる工事のポイント、ポイントで現場見学会をして頂きたい」「市や県と協力して、年に数回、維持管理活動を行ってもよいのではないか」「流域ネットワークを結成して、この会をこの地区だけでなく流域全体に広めたい」など、前向きな意見が多数出されている。

このようなことから、今回のワークショップは一定の成果を上げることができたと考えられるが、大切なのは、自発的・継続的に川と住民が関わりを持ち続けることであると考える。この島田川においては住民参加は始まったばかりであり、ワークショップはきっかけに過ぎないと言える。現時点で前述のように前向きな意見があげられていることを十分に噛み砕いて、今後は、この計画をより良いものとして具現化するためまた、改修後も地域住民と一体となって河川環境の維持を図っていくため、工事期間中や工事後の住民との連携を如何に図っていくべきか、積極的な取り組みが進むことを期待する。